

幼児行動活性度指標に関する研究

峰松, 修
九州大学健康科学センター

田尻, 由美子
精華女子短期大学

関, 文恭
九州大学医学部保健学科

峰松, 康世
香蘭女子短期大学

<https://doi.org/10.15017/446>

出版情報 : 健康科学. 7, pp.91-100, 1985-03. Institute of Health Science, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

幼児行動活性度指標に関する研究

峰 松 修* 田 尻 由美子**
関 文 恭*** 峰 松 康 世****

A Study of Behavioral Activity Scale for Children

Osamu MINEMATSU* Yumiko TAJIRI**
Fumiyasu SEKI*** Yasuyo MINEMATSU****

For measuring child's reactivity and spontaneity, the behavioral activity scale (BASC), which was consisted of 29 items, was constructed. 395 children (3yr. to 6yr.) in day nurseries and kindergarten were evaluated to examine reliability and validity of BASC. 28 items showed the high loading in the first component according to the principal component analysis, suggesting that each item of the scale estimates the identical subjects. The factor analysis using varimax method extracted 5 factors as follows: 1) self-expression and responsiveness to others, 2) concentration and positiveness to accomplish a purpose, 3) physical health signs, 4) playing widely and rhythmically, 5) emotion and sleep. There were significant correlations between the assessments by the different observers, although observer to observer differences were shown in mean scores. These results suggest that BASC'S observer measures a child relatively in a group. In the follow-up studies after 22 months, there were significant correlations in 14 items, but total score correlation ($r=.35$) couldn't reach significant level. Clinical applications of BASC were discussed in view of child development and patterns of child life styles.

(Journal of Health Science, Kyushu University, 7 : 91~100, 1985)

いきいきした子供を育てることは、すべてのひとにとっての願いである。ところが、近年これを阻害するような、新しいかたちの心身の不調が報告されはじめた。

正木らは^{13-17, 23)}、質問紙法により養護教諭や保育者が感じている、子供のからだや運動機能の経年変化を調査した。これによると、幼児期では「指しゃぶり」・「虫歯」・「鼻血がでやすい」・「朝からあくび」・「すぐ疲れたという」・「保育時間中、目がトロン」・

「自由時間ボーッ」など、虫歯をのぞけば病気とはいえないような、子供の奇妙な状態がふえてきていると報告した。これはこれまでの子供像とはかなりことなるものであるが、このようなからだの不調に関する調査報告が、おこなわれてきている(川上⁷⁾、金釜⁹⁾、大島²⁰⁾など)。

このような子供のからだの異常の調査のほかに、子供の生活技能や生活体験の変化についての研究も報告されてきた(谷田貝²⁰⁾、藤本²⁾、文部省¹⁹⁾など)。これら

この研究は、九州大学大型計算機センターのSPSSで統計処理がおこなわれた。

* Institute of Health Science, Kyushu University 11, Kasuga 816, Japan

** Seika Woman's College, Oonishida, Itazuke, Hakataku, Fukuoka, 812, Japan

*** School of Health Sciences, Kyushu University, Maidashi, Higashiku, Fukuoka 812, Japan

**** Kouran Woman's College, Yokote, Mina-miku, 816, Fukuoka Japan

の研究によると、手や足の運動機能の功緻性が近年しだいに劣化はじめていることがあきらかにされた。「鉛筆を削ること」、「はしの使い方」、「卵をわること」、「ちょう結び」、「かなづちで、くぎをうつこと」、「ハサミで布をきる」、「タオルしぼり」、「顔を洗うこと」、「ナイフでくだものの皮をむく」など、日常の生活技能の発達の遅滞や停滞がめだっている。また、その種の体験そのものをしたことのない子供が、増えてきていることが指摘された。

子供にあらわれた発達遅滞あるいは体の失調状態の原因をしらべる研究もさかんにおこなわれるようになった。子供の日常の生活事象の構造や内容と、その時間的割りつけの変化が、からだの変調や生活技能の稚劣化をまねいている、とする研究がおおい。生活時間とその内容の時代的変遷については、すでにNHK放送世論調査所の経年比較調査において、あきらかにされてきたものである（NHK放送世論調査所²⁴、斎藤²⁹）。「おそ寝・おそ起き」、「睡眠時間の減少」、「屋外遊びの減少」、「遊びのグループ・サイズの縮小と異年齢集団遊びの減少」、「朝食の欠食傾向」、「おとなの同席しない食事」、「お手伝い時間の減少」、「テレビ多視聴」、「学外での、学習やお稽古事の時間の増大」——などの結果は、他の調査資料でもうらづけられている（友定ほか³²、大竹ほか²⁷、森上ほか^{20,21}、谷田貝ほか³¹、日教組・民研共同調査委員会²⁵、足立¹、小石¹⁰など）。

川添⁹は、生活リズムと生体リズム（Biorhythm）との関連から、系統発生的にそなわっている生体のリズムを乱すことにより、自律神経機能や生理的機能の調和が乱れ、そのことが発育発達の遅滞や停滞あるいは歪曲をひきおこす直接的原因ないしは誘因になっている、とのべている。このことに着目して、障害児の保育で、健康な生活リズムの獲得を基礎とした指導もおこない効果をあげている¹⁰。教育の現場でも生活リズムをととのえ、生活の内容を組み替える働きかけが試みられるようになり、指導の効果が報告されている（永尾²²、藤原³、川上⁸、前田ほか¹²など）。

ところでこれまでの研究は、主として身体次元の子供の問題を中心に調べられたものである。しかし、無気力、注意集中困難、言語表現・伝達能力の稚劣化など、行動・情動の変化について事例報告的にふれた研究も少くない。平井⁹は、「自発性、主体性、独立性にもとづいてははっきりと自己主張し、しかも独創性のある子どもは（成人もまた）、毎日の生活が意欲に溢れているといってもよい。つまり、いきいきとして行動しており、それが活動 activity という状態である生き甲

斐のある人生を送っているのである」とのべている。そして、現代の教育や保育に意欲や思いやりを育てるものが欠けがちであり、このことが子供の行動の病理（学校恐怖、家庭内暴力など）をひきおこすひとつの原因になっていることを指摘している。いきいきとして至適な心身の状態が現代の子供たちに失われてきていると要約できよう。

ところで、子供の心理的発達の時代的変遷について、系統的・組織的に研究したものは少ないようである。これは妥当な尺度が開発されていないためであろう。とくにこれまで問題にされてきている（岡野²⁸など）、「子供のいきいきした状態」を、標準化された一定の評定尺度で測定しようとした研究はない。

本研究は、幼児の行動にあらわれた「いきいきした心身の状態（ここでは《行動活性度》とよぶことにする）」を評定する尺度を構成し、その妥当性を検討することを目的とするものである。ここでいう「行動活性度」とは、①社会的刺激にたいする適切な即応性と準備性、および②外界にたいして自発的・効果的に働きかけることのできる心身の至適状態、を行動と情動の側面からみたものと定義しておくことにする。

方 法

1. 評定項目の作成：C保育園の保母13名に、幼児（ここでは3才から6才ぐらいを目途に）が「いきいきしているときの行動や状態」について、自由に記述してもらった。ここで得られた記述と筆者らの検討会で得られたものとをあわせて、29項目からなる評定尺度が構成された（表2）。項目化するさいには、①さきに述べた定義にはほぼ合致すること、②行動観察のさい操作的に定義することが出来やすいこと、を条件に評定項目がえらばれた。したがって、「目が輝いている」とか「のびのびしている」など、行動観察のさい曖昧さのあるものは出来るだけはぶかれた。さらに、評定のターゲットとなる行動徴象の例を、それぞれの評定項目につけ、多義性が小さくなるように配慮した（評定が容易であるとみなされる項目では、その例はつけられていない）。評定はそれぞれの項目ごとに、いわゆるリカートタイプの五段階評価でおこない、得点が高いと行動活性度が高いとされる。

作成された29項目はさらに、身体活動レベル（項目番号1—5、以下おなじ）、身体健康レベル（6—13）、情動レベル（14—16）、言語レベル（17—20）、課題遂行レベル（21—25）、対人関係と遊びレベル（26—

表1 評定対象の園児のクラス区分*

	3才児クラス		4才児クラス		5才児クラス		
	男	女	男	女	男	女	
C 保育園	9	13	13	11	8	18	
T 保育園	22	19	14	15	15	12	
J 保育園	—	—	—	—	16	20	
A 幼稚園	—	—	—	—	89	101	
TOTAL	31	32	27	26	128	151	395

* クラス区分は正確な年齢区分をしめしているとはいえない。
年度のはじめの年齢で、クラスが構成されていることが多いので、調査時にはさらにひとつ年をとっているこどももいる。

29) —に下位分類された。

2. 調査の実施; Ss: 被験者は、保育園と幼稚園の3才児クラスから5才児クラスの幼児395名である(表1)。C 保育園(昭和58年1月調査)は福岡市内商工地区、T 保育園(昭和58年8月)は大牟田市郊外の農村地区、J 保育園(昭和58年8月)は大牟田市内商業地区、A 幼稚園(昭和59年2月—5月)は福岡市内公団地近接地であった。

実施方法: クラスの担当保育者が、そのクラスの幼児全員の評定をおこなった。副担当者がいる場合、主担当者とは独立に評定がおこなわれた。C 保育園の3才児クラスについては、22ヶ月後(5才児クラス)にもフォロー・アップ評定がおこなわれた。この場合の評定者はことなっている。

評定のさいの指示は、つぎのとうりである

- ①評定は5段階評定でおこなうこと。
- ②評定のさいは、長時間かけないで、各項目ごとに5秒以内ぐらいで決定すること、
- ③登園後2時間(あるいは午前中)の子供の行動や状態を思い浮かべて評定すること。主として、寒い時期の子供の様子を念頭において評定する。評定が完了するまで、他の評定者と評定について相談しあわないこと。

子供の評定終了後、「幼児行動活性度指標」についての評価を、評定担当保育者に依頼した(C 保育園の主担当者(3名)のみ)。各評定項目(29項目)ごとに五段階評定で、つぎのような事柄についての評価をもらった。好ましい方向で評価がたかいほど、得点はあがるように構成された。

- ①評定のしやすさの評価(「評定難易度」: 評定しやすい—評定しにくい)。
- ②「いきいきした子供像」をはかるための評定項目としての適切性(「活性度把握度」: 適切—不適

切)。

- ③生活リズムの乱れやしつけの不適切さと評定項目との関連性(「生活関連度」: 関連する—関連しない)。

結果と考察

1. 表2に評定項目と、その項目ごとの平均、標準偏差をあげている。総得点(全項目の得点の総和)では、男女間の有意な差はみとめられなかった。どの項目においても、「どちらでもない(評定3点)」よりやや良い評定がなされるようである。

2. フォローアップ(22ヶ月後)の評定との相関は、総得点で比較するでみると、 $r=0.35$ であり有意水準にたしななかった(表2)。身体健康レベルの項目など、14項目で5%水準以上の有意な相関がみとめられた。総得点からみたこの指標の予測妥当性は、かならずしも高くない。幼児の発達の変異性によるものとおもわれる。しかし、項目のなかでも変化しやすいものとしにくいものがあるところをみれば、ことなる評価者による再評定であったことや、項目の特性上信頼性に問題がある項目があったこと、などの可能性も否定できない。

3. この指標の、評定者(保育者)による評価の結果はつぎのとうりである(表2)。評定の難易度は、「やや容易(3.4点)」という程度で、かならずしも評定が容易であるという印象をあたえていない。「いきいきした子供をとられるのに有効かどうか(活性度把握度)」と「子供の日常の生活リズムなどとの関連性(生活関連度)」については、かなり有効であり関連していると評価された。

4. 評価項目の因子的妥当性を検討するため、主成分分析と Varimax 法による因子分析をおこなった

表2 評定項目ごとの平均, 標準偏差, フォローアップとの相関および保育者による評定項目の評価

評 定 項 目	男 児 (187名)			女 児 (208名)			全 体 (395名)			保育者による評定項目の評価			
	男 児 (187名)	女 児 (208名)	全 体 (395名)	男 児 (187名)	女 児 (208名)	全 体 (395名)	フォロ アップ による	ロー プに 相関	評 定 難 易 度	活 性 性 把 握 度	生 活 関 連 度		
V01: 遊びの活動範囲が広い (ごろごろした状態や、室内になんとなくとどまっ ているような状態をほとんどみかけない)	3.31 (.96)	3.25 (.93)	3.28 (.94)				.85		3.3	3.7	4.3		
V02: 目的的な動きをすることが多い (ぼんやりと人の遊びを見たり、ぶらぶらしたりす ることが多い)	3.38 (.95)	3.38 (.90)	3.38 (.92)				.28		3.0	3.0	4.0		
V03: そと遊びに、さっとでる (自由遊びの時間などで、体を大きく動かす遊びを喜 ぶ)	3.41 (.95)	3.43 (.89)	3.42 (.92)				.28		3.7	3.7	4.3		
V04: ある程度の距離を疲れを訴えずに歩きとらす (4.5才児で3-4km)	4.04 (.93)	4.00 (.87)	4.02 # (.90)				.16		3.0	3.3	3.7		
V05: 身のこなしに、はずむような躍動性が認められる (たとえば、急いで歩くときにふと思わずスキップをし たり、楽しいときにふと鼻唄がでたりするようなこと)	3.20 (.85)	3.51 (.88)	3.36 (.88)				.53 **		3.0	4.0	3.0		
V06: 食欲旺盛である (給食でおかわりすることが多い)	3.34 (.92)	3.18 (.85)	3.25 (.89)				.57 **		4.7	4.3	4.0		
V07: 食事のすききらいがある	3.44 (1.05)	3.44 (.95)	3.44 (.99)				.51 *		4.0	3.3	4.7		
V08: 顔の血色がよい (顔に赤味があり、つやがある)	3.44 (.82)	3.51 (.76)	3.48 (.79)				.57 **		2.7	3.7	3.7		
V09: カゼなどの病気にかかりにくい	3.32 (1.02)	3.46 (.86)	3.40 # (.94)				.68 ***		3.7	4.0	4.3		
V10: 薄着でいても平気である (寒がりでない)	3.49 (.97)	3.44 (.97)	3.46 # (.96)				.68 ***		3.7	3.7	4.3		
V11: 朝、すっきりめざめている (あくびをしたり、しっかきめざめていないような様子 は見かけない)	3.43 (.92)	3.58 (.93)	3.51 (.92)				.46 *		3.7	4.0	5.0		
V12: 昼寝の寝つきがよい	3.35 (1.12)	3.39 (1.00)	3.37 ## (1.06)				.34		5.0	4.3	5.0		
V13: 昼寝からの寝おきがよい (起きてから、さっと次の行動に移れる)	3.20 (1.04)	3.11 (.89)	3.16 ## (.97)				.52 *		5.0	4.7	4.7		
V14: 笑顔がよく認められる (表情が豊かである)	3.50 (.91)	3.70 (.92)	3.61 (.92)				.34		3.3	4.0	4.0		
V15: メソメソした不機嫌な状態を見かけない	3.42 (.83)	3.47 (1.00)	3.44 (.92)				-.10		3.0	3.3	4.3		
V16: 思いどおりにならなくて不機嫌になっても、それを 早くきかえることができる (すねてしまうことは少ない)	3.26 (.93)	3.38 (.87)	3.32 (.90)				-.19		2.7	3.3	3.3		
V17: 言葉による働きかけを自分からしてることが多い (あいさつ場面などで自分からする)	3.48 (.91)	3.74 (.95)	3.61 (.94)				.28		3.3	3.3	4.0		
V18: 積極的に自分の要求や気持ちを相手(友達、先生、他の 親)に、言葉で伝えようとする	3.46 (.97)	3.73 (.97)	3.60 (.98)				.55 **		3.7	4.0	3.7		
V19: 他人からの言語的働きかけに、 さっと応答しようとする	3.52 (.91)	3.67 (.92)	3.60 (.92)				.62 ***		4.0	3.0	3.7		
V20: 遊びやグループ活動のなかで、 みんなにわかるような元気のよい声がだせる	3.58 (.93)	3.68 (.93)	3.63 (.93)				.55 **		3.7	4.0	3.3		
V21: 毎日きまっている仕事は、 自分からさっさとしてしまう	3.34 (.84)	3.54 (.87)	3.44 # (.86)				.38		4.0	4.0	5.0		
V22: 課題へのさそいに拒否の反応がさっとできる (したいのかしたくないのか、はっきりしないようなか かわり方が多い)	3.44 (.93)	3.69 (.93)	3.57 (.94)				.30		2.7	4.0	3.7		
V23: 課題への集中力や持続力がある	3.31 (.86)	3.61 (.88)	3.47 (.88)				.00		2.7	4.0	4.0		
V24: 次の作業(遊びや「仕事」)に、短時間で無理なく自 然に移行できる	3.35 (.91)	3.69 (.88)	3.53 (.91)				.44 *		3.3	4.0	4.0		
V25: いろいろな課題や遊びに積極的な興味を示す	3.47 (.85)	3.63 (.90)	3.56 (.88)				.61 **		2.7	3.7	4.0		
V26: 友だちの遊びをよく見て、 積極的に参加しようとする	3.39 (.90)	3.49 (.92)	3.44 (.91)				.21		3.3	4.0	4.0		
V27: ひとつの遊びに深くかかわり、 十分に遊びぬくことができる (こちらの遊びからあちらの遊びへと短時間で移り歩い たり、参加していても、いつのまにか遊びからはずれ てぼんやりしているというようなことが少ない)	3.40 (.92)	3.55 (.92)	3.48 (.92)				-.14		3.3	4.3	3.0		
V28: 友だちがよく加わってくるような 面白い遊びを思いつく	3.03 (.81)	2.98 (.81)	3.00 (.81)				.34		2.7	2.7	3.0		
V29: 友だちの動きによく対応できる (たとえば、困っている友だちなどを気づかう余裕があ ることなど)	3.29 (.81)	3.49 (.87)	3.40 (.85)				.68 ***		3.3	3.0	3.7		
TOTAL	102.9 (18.3)	104.1 (19.8)	103.5 ## (18.4)				.35		3.4	3.7	4.0		

()は標準偏差

298人(男児 145, 女児 153) ## 166人(男児 84, 女児 82)

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

表3 幼児行動活性度指標の主成分分析

	F1	F2	F3	F4	F5	h ²
対人関係レベル（他に対する即応性・応答性・自己表現など）						
V18：積極的に自分の要求や気持ちを相手に、……言葉で伝えようとする	.808	-.263	-.183	.049	-.249	.819
V17：言葉による働きかけを……自分からしてることが多い	.783	-.166	-.045	.028	-.373	.782
V19：他の人からの言語的働きかけに、……さっと応答しようとする	.822	-.211	-.193	-.110	-.133	.787
V20：遊びやグループ活動のなかで、みんなにわかるような元気のよい声がかせる	.805	-.179	-.181	-.008	-.123	.727
V22：課題へのさそいに拒否の反応がさっとできる	.835	-.232	-.022	-.059	-.035	.756
V14：笑顔がよく認められる	.783	-.054	-.059	.023	-.254	.685
V28：友だちがよく加わってくるような面白い遊びを思いつく	.641	-.292	-.206	.211	.140	.603
V29：友だちの動きによく対応できる	.723	-.185	-.012	-.120	.070	.576
課題遂行レベル（課題に対する積極性・集中性・持続性など）						
V23：課題への集中力や持続力がある	.663	-.200	.255	-.355	.279	.748
V27：ひとつの遊びに深くかかわり、十分に遊びぬくことができる	.767	-.217	.066	-.201	.234	.735
V24：次の作業に、短時間で無理なく自然に移行できる	.746	-.209	.277	-.201	.170	.747
V25：いろいろな課題や遊びに積極的な興味を示す	.843	-.208	.094	-.113	.071	.781
V21：毎日きまっている仕事は、自分からさっとしてしまう	.634	-.105	.315	-.174	.337	.656
V26：友だちの遊びをよく見て、積極的に参加しようとする	.816	-.194	-.032	.004	.107	.715
身体健康レベル（一般的健康徴候）						
V07：食事の好ききらいがない	.514	.607	-.109	-.388	.011	.795
V06：食欲旺盛である	.494	.594	-.261	-.301	.091	.764
V08：顔の血色がよい	.678	.465	-.083	-.077	-.066	.693
V09：カゼなどの病気にかかりにくい	.630	.484	-.043	-.091	-.054	.645
V10：薄着でいても平気である	.598	.466	-.062	.115	.047	.594
身体活動レベル（身体活動の躍動性・広域性・焦点化など）						
V01：遊びの活動範囲が広い	.687	.104	-.240	.461	.206	.795
V02：目的的な動きをすることが多い	.795	-.015	-.225	.231	.151	.759
V03：そと遊びに、さっと出る	.733	.072	-.164	.245	.256	.694
V05：身のこなしに、はずむような躍動性が認められる	.738	-.100	-.176	.106	-.137	.615
V04：ある程度の距離を疲れを訴えずに歩きとおす	.588	.121	-.038	.175	-.043	.395
情動・睡眠レベル（情動の切り換え、睡眠-覚醒のリズムなど）						
V11：朝、すっきりめざめている	.688	.296	.313	.077	-.029	.665
V15：メソメソした不機嫌な状態を見かけない	.689	.069	.314	-.077	-.396	.741
V12：昼寝の寝つきがよい	.235	.199	.573	.503	.001	.676
V16：思いどおりにならなくて不機嫌になっても、それを早くきりかえることができる	.593	.038	.394	.001	-.330	.618
V13：昼寝からの寝おきがよい	.569	.242	.236	.300	.180	.560

表4 幼児行動活性度指標の因子分析(5因子解)

	F1	F2	F3	F4	F5	h ²
対人関係レベル(他に対する即応性・応答性・自己表現など)						
V18: 積極的に自分の要求や気持ちを相手に、言葉で伝えようとする	.828	.254	.131	.250	.116	.843
V17: 言葉による働きかけを自分からしてることが多い	.768	.228	.169	.132	.267	.759
V19: 他人からの言語的働きかけに、さっと応答しようとする	.730	.378	.239	.229	.045	.787
V20: 遊びやグループ活動のなかで、みんなにわかるような元気の良い声がだせる	.682	.340	.223	.272	.094	.713
V22: 課題へのさそいに拒否の反応がさっとできる	.626	.487	.166	.242	.171	.745
V14: 笑顔がよく認められる	.621	.264	.246	.216	.282	.642
V28: 友だちがよく加わってくるような面白い遊びを思いつく	.471	.322	.031	.419	.038	.504
V29: 友だちの動きによく対応できる	.464	.467	.183	.230	.122	.535
課題遂行レベル(課題に対する積極性・集中性・持続性など)						
V23: 課題への集中力や持続力がある	.243	.751	.167	.079	.133	.675
V27: ひとつの遊びに深くかかわり、十分に遊びぬくことができる	.360	.694	.178	.266	.101	.724
V24: 次の作業に、短時間で無理なく自然に移行できる	.356	.687	.125	.123	.275	.705
V25: いろいろな課題や遊びに積極的な興味を示す	.517	.611	.180	.227	.217	.772
V21: 毎日きまっている仕事は、自分からさっとしてしまう	.213	.578	.140	.159	.278	.502
V26: 友だちの遊びをよく見て、積極的に参加しようとする	.501	.511	.167	.357	.167	.695
身体健康レベル(一般的健康徴候)						
V07: 食事の好ききらいがない	.115	.180	.858	.019	.082	.788
V06: 食欲旺盛である	.109	.121	.817	.169	.008	.723
V08: 顔の血色がよい	.299	.156	.619	.212	.307	.636
V09: カゼなどの病気にかかりにくい	.249	.144	.581	.186	.337	.568
V10: 薄着でいても平気である	.186	.099	.480	.334	.363	.518
身体活動レベル(身体活動の躍動性・広域性・焦点化など)						
V01: 遊びの活動範囲が広い	.296	.114	.199	.781	.256	.815
V02: 目的的な動きをすることが多い	.430	.306	.243	.621	.170	.751
V03: そと遊びに、さっと出る	.291	.309	.259	.609	.215	.664
V05: 身のこなしに、はずむような躍動性が認められる	.554	.264	.199	.329	.180	.557
V04: ある程度の距離を疲れを訴えずに歩きとおす	.302	.206	.245	.284	.258	.341
情動・睡眠レベル(情動の切り換え、睡眠-覚醒のリズムなど)						
V11: 朝、すっきりめざめている	.256	.284	.366	.165	.559	.619
V15: メソメソした不機嫌な状態を見かけない	.462	.289	.246	-.012	.513	.621
V12: 昼寝の寝つきがよい	-.017	.055	.009	.115	.494	.260
V16: 思いどおりにならなくて不機嫌になっても、それを早くきりかえることができる	.340	.282	.155	.040	.483	.454
V13: 昼寝からの寝おきがよい	.181	.190	.233	.297	.459	.422

(表3, 4)。これらの表は, Varimax 法による因子分析の結果にもとずいて, 下位尺度があらたに命名され, それにもとずいて項目のならばかえがおこなわれたものでしめしている。主成分分析によると, 項目番号12の「昼寝の寝つきがよい」をのぞいて, 第1主成分に負荷がたかい。このことは, この評定尺度が一義的にあるひとつのことがらをはかっている, と推定してよいことをしめしている。筆者らが測定しようとした, 行動活性度がはかられているとみなすことができる。ただ, 第1主成分だけでなく, 第2主成分以下に負荷がたかいものが一部の項目にある。身体健康レベ

ルの項目(項目番号7,6,8,9,10)がそれである。ほかに情動・睡眠レベルの項目にもそのような傾向がすこしみとめられる。身体次元のものは, ここでいう行動活性度のなかでは特別な意味もつものかもしれない。

Varimax 法による因子分析では, 5因子解で妥当な解釈がえられた。方法の1でのべた下位尺度のわけかたと, ほぼ同じ結果であった。ただ, 身体健康レベルにいれられていた睡眠関連の項目(No. 11, 12, 13)は, 情動・睡眠レベルの項目としてまとめられた。また, 言語レベルとしてみなされた項目(No.17, 18, 19, 20)は, 対人関係と遊びレベルの項目の一部(No. 28,

表5 二者評定による相関, 平均, 標準偏差
—— C保育園4才児クラス(24人) ——

項目番号	相関	評定者 A	評定者 B	得点の差の 有意水準
01	.76 ***	2.5 (0.72)	2.8 (1.27)	
02	.57 **	3.4 (0.88)	3.8 (1.15)	
03	.75 ***	3.8 (1.02)	3.2 (1.14)	*
04	.77 ***	4.0 (0.95)	5.0 (0.00)	***
05	.52 **	3.6 (0.97)	3.9 (0.88)	
06	.63 ***	3.3 (1.09)	3.5 (1.14)	
07	.68 ***	3.5 (1.14)	3.8 (1.11)	
08	.30	4.1 (0.88)	3.6 (0.77)	*
09	.60 **	3.8 (0.90)	3.1 (0.93)	*
10	.60 **	3.7 (0.70)	3.1 (1.21)	*
11	.49 **	4.0 (0.62)	3.9 (1.14)	
12	.47 **	3.1 (0.45)	3.0 (1.46)	
13	.76 ***	3.4 (0.97)	2.9 (1.35)	
14	.43 *	4.3 (0.62)	4.3 (0.92)	
15	.37 *	3.5 (0.88)	3.7 (1.05)	
16	.42 *	2.9 (0.99)	3.5 (0.98)	*
17	.55 **	3.6 (0.65)	4.2 (0.92)	*
18	.48 **	3.9 (0.74)	4.1 (1.14)	
19	.55 **	4.3 (0.82)	4.3 (1.12)	
20	.53 **	4.1 (0.83)	4.1 (1.15)	
21	.55 **	3.7 (0.76)	3.5 (0.83)	
22	.40 *	3.9 (1.03)	3.9 (1.12)	
23	.46 *	3.9 (0.65)	3.8 (0.96)	
24	.57 **	4.2 (0.87)	4.2 (0.98)	
25	.46 *	4.1 (0.80)	3.9 (1.12)	
26	.58 **	4.1 (0.97)	3.7 (1.43)	
27	.59 **	4.1 (0.88)	4.1 (1.15)	
28	.44 *	2.3 (0.56)	3.5 (1.18)	***
29	.73 ***	3.6 (0.92)	3.8 (1.13)	
Total	.73 ***	106.6(17.56)	108.2(19.80)	

() は標準偏差

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

29) などとあわせて、対人関係レベルと新たに命名された。Varimax 法ではこのような因子がえられたが、主成分分析の結果とあわせてかんがえると、下位尺度のどれかが行動活性度を測定しているものとみなすことができる。

5. 同一の対象集団を、2人の評定者が同時に評定した場合の、項目ごとの平均得点と相関係数を表5にしめした(C保育園4才児クラスの例)。相関はどの項目でも高い値がえられたが、項目ごとの平均得点では差が有意にことなるものがみられた。このことは、個人の行動活性度得点は評定者によって変わりうるが、集団内のその個人の位置(順位)は評定者がことなっても変わらないということを示唆している。この指標による得点は、評定者の評定の偏向(あくまで評定するとか、からく評定しがちとか、保育目標の設定水準のちがいとかなよとおもわれるが)をうけることがあるので、集団のなかでの相対評価としてみるほうが安全であろう。この傾向は、他のクラスのデータでも一貫して認められるものであった。

総合的考察

前田ら¹²⁾は、幼児の平均睡眠時間とその6カ月間の身長とのび、および幼児行動活性度得点との関係をしらべた。この結果、睡眠時間の長いほど身長とのびがおおきく、幼児行動活性度得点がかたいことをみいだした。峰松¹³⁾は、幼児の生活事象と幼児行動活性度得点との関係をしらべ、朝の生活事象と関連がふかいことをあきらかにした。すなわち、起床時刻とのあいだに $r = -0.30$ ($P < .05$)、朝の洗顔習慣と $r = 0.29$ ($P < .05$)、朝の歯磨き習慣と $r = 0.34$ ($P < .01$)、朝の排便習慣と $r = 0.33$ ($P < .01$)の相関が、幼児行動活性度得点とのあいだにあることをみいだした。ちなみに起床時刻は、睡眠時間・入眠時刻・テレビ視聴時間・夜の絵本の読みきかせなどと、有意な相関がみとめられている。すなわち、生活事象はたがいに有機的に関連し(システムとして機能し)、しかもそれが幼児の行動活性性に影響をあたえていることになる。

したがって生活リズムをととのえるための試みでは、たんにひとつひとつの生活事象をばらばらに変化させようとしても変化しにくく、またその変化の持続もあまり期待できないことに注意すべきであろう。ひとつひとつの生活事象が生活全体のなかでどのように機能し、位置づけられているかを検討することから考えていくべきものであろう。いずれにしても、幼児行

動活性度指標でははかられているものは、その幼児が生得的にもっているものだけでなく、生活のなかで獲得されていくもののおおきくと推定される。

この評定尺度は、評価時点での集団内の個人の相対的位置について、鋭敏である。すなわち評定者がことなっても、評定される子供の集団のなかでの相対的位置は、変化しにくい。しかし、評定者ごとの評定の体系に影響されやすいため、絶対評価として得点をもちいるときには、取り扱いに工夫が必要である。評定者がことなる子供の得点を比較するときは、それぞれの評定者ごとの標準化された得点(偏差値など)で比較すべきであろう。評定の難易度評価(表1)でも、評定がかならずしも容易であるとはいえないので、評定項目のこんごの改善が必要である。また、評定項目ごとに、その行動を特定し、実際の行動観察との比較研究も必要である。タイムサンプリングによる行動観察とその得点化をおこなうことにより、絶対評価のてがかりがえられることになろう。子供の行動の時代的变化は、このような手続きをふむことをつうじて明らかにされていくものと考えられる。

健康状態や睡眠にかんすることがらは、生活リズムとの関連でこれまでよく検討されて来た。しかし、行動の活性性の指標としてこれらをもちいることには、概念的に無理がある。主成分分析の結果でも、第二因子以下に負荷されてでているものは、健康状態や睡眠にかんする項目がおおい。とくに睡眠については、5才以上の子供の集団保育や幼稚園教育の現場では観察しにくい場合がおおい。したがって健康状態や睡眠にかんする評定項目は、幼児行動活性度指標では参考項目としてとりあつかってもよいであろう。なお、これらの項目を除いても、この指標の内部的整合性はたまたたれるという、多変量解析の結果がえられている。

この評定尺度で、もし満点をとった子供がいるとすれば、それはどういう子供であろうか。それは案外、気づまりな印象を周囲にあたえる子供かもしれない。ここでは測られていないが、しかし重要とおもえるものは、relaxationの状態をはかる因子かもしれない。状況に応じてスーッと気をぬかすことができる、「無駄の有駄」をやれる、無為を大切にできる、など活性度をささえるあとひとつの大切な要因とかんがえられる。健康にrelaxできることは、活性性のあとひとつの側面かもしれない。子供のrelaxしている状態を、行動次元でとらえる評定項目を、考慮していくべきであろう。

さきにふれた生体の至適リズムだけが、行動の活性

性に影響しているわけではない。親の養育態度や、保育園などの集団保育の内容からも強い影響をうけているものと推定される。これまでフリッカー値による研究²⁹⁾があるが、そのほかの精神生理学的指標や血液生化学的指標などによる鋭敏な指標を開発し行動活性度指標とくみあわせることで、活性性に影響する要因が、より明確にされていくものとおもわれる。

引用文献

- 1) 足立己幸：ひとりぼっちの食卓，足立己幸：なぜひとりで食べるの，日本放送出版協会，1983，18-29.
- 2) 藤本浩之輔：子どもの道具使用と手先の器用さに関する調査，大阪市立大学人文学部紀要，29(2)，26-49，1977.
- 3) 藤原義隆：生活点検の方法と理論，藤原義隆：教師のしごと，生活点検，部落問題研究所，1982，155-300.
- 4) 平井信義：意欲（自主性）と思いやり（情操）の構造とその発達（試論），大妻女子大学家政学部紀要，18，105-115，1982.
- 5) 金釜武治：十分な睡眠で健康な朝の発を，子どもと教育，124，132-139，1984（11月臨時増刊号）.
- 7) 川上康一：驚くべき背筋力と疲労度，川上康一：レポート 子どもの心とからだ あゆみ出版，1979，61-111.
- 8) 川上康一：実践-親子で語り合うタベほか，川上康一：レポート 子どもの心とからだ，あゆみ出版，1979，167-193.
- 9) 川添邦俊：「生活リズム」の教育的課題 児童心理，38(13)，11-21，1984.
- 10) 川添邦俊：障害児の育つみちすじ：ミネルヴァ書房，1978.
- 11) 小石寛文：子どもの生活の実態に関する調査，神戸大学教育学部研究集録，54，81-100.
- 12) 前田幸子，西角幸子，堀井智恵子，松本トヨ：子供の身長に関する一考察（その2），日本保育学会第37回大会研究論文集，78-79，1984.
- 13) 正木健雄：子どもの生活環境と生活リズム，児童心理，38(13)，50-57，1984.
- 14) 正木健雄：子どものからだの変化の方向，正木健雄（編著）：子どものからだづくり，全国社会福祉協議会，1984，6-40.
- 15) 正木健雄：ここまですすんだからだの調査，子どもと教育，124，16-53，1984（11月臨時増刊号）
- 16) 正木健雄：いま，子どものからだにみられること，体育科教育，13-16，1984（6月臨時増刊号）.
- 17) 正木健雄：“子どもの体力”を探る，正木健雄：子どもの体力，大月書店，1979，11-75.
- 18) 峰松 修：未発表資料，1984.
- 19) 文部省：児童の日常生活に関する調査，1984.
- 20) 森上史朗，馬場吉三，石井とめ子：児童の生活構造の時代的変遷に関する研究（第1報）その2 遊びとテレビ視聴，大妻女子大学家政学部紀要，9，37-44，1973.
- 21) 森上史朗，馬場吉三，石井とめ子，石橋すみえ：児童の生活構造の時代的変遷に関する研究（第2報）秋田の過疎地における実態調査 その2 遊びとテレビ視聴 大妻女子大学家政学部紀要，10，76-82，1974.
- 22) 永尾康雄：生活調査をいかし父母とともに生活づくり，児童心理，38(13)，178-193，1984.
- 23) NHK「子どものからだ」プロジェクトチーム：警告!! 子どものからだは蝕まれている，正木健雄・野口三千三（編）：子どものからだは蝕まれている，柏樹社，1979，10-37.
- 24) NHK 放送世論調査所（編）：日本の子どもたち，日本放送出版協会，1980.
- 25) 日教組民研共同調査委員会：子どもの環境調査，1981.
- 26) 土島紀玖夫：子どもは疲れている，正木健雄・野口三千三（編）：子どものからだは蝕まれている，柏樹社，1979，51-68.
- 27) 大竹智恵子，平井信義，山本キク：児童の生活構造の時代的変遷に関する研究（第1報）その1 幼児の生活空間，大妻女子大学家政学部紀要，9，29-36，1973.
- 28) 岡野雅子：幼児にとっての時間——「イキイキと遊ぶ」の時間的側面について——，日本保育学会第37回大会研究論文集，202-203，1984.
- 29) 斎藤賢治：子どもの生活リズム，斎藤賢治：統計にみる子どもの生活とリズム，あゆみ出版，1983，65-144.
- 30) 谷田貝公昭：ハンも使えない，サンケイ出版，1984.
- 31) 谷田貝公昭，村越 晃，村田恵子，館山知里，渡部真弓，佐久間弥生：足指の巧緻性の研究II，日本保育学会第37回大会研究論文集，136-137，1984.
- 32) 友定啓子，田原マチ子：山口市における幼児の生

活, 山口大学教育学部紀要, 32 (3), 99-112,
1983.